

「日常」があるということ

緊急事態宣言期間が何度目かの終わりを迎え、10月になりました。2期制の本校では、前期卒業式で5名の卒業生の旅立ちをお祝いし、後期入学式では14名の新生を迎えました。新生のみなさん、知らない顔ばかりの中で不安や緊張も大きいかとは思いますが、わからないことは遠慮せず周囲に尋ねてください。周りのみなさんも、新しい仲間が早くこの環境に慣れることができるよう、優しく接してあげてください。

さて、こんな風に、当たり前のように入学式や卒業式の話をしていますが、ほんの1年と半年前はそうではありませんでした。今もなお、多くの学校行事が本来の形通りには実施できない日が続いています。社会を覆う閉塞感は依然として晴れてはいません。

とはいえこの間、大きな不安と向き合う中で、たくましく生きようとする人の力強さ、心温まる人の優しさにもたくさん出会いました。そんなことに気づいたり、感じ取ったりしている私自身の現在のありようは、26年前の阪神淡路大震災直後の自分と重なる気がしています。

今回のように、さすがにこれはなくならないう日常が、これほどまであっけなく失われてしまうことを経験した後では、日常の持つ意味が大きく変わります。灯りがつくこと、水が出ること、食べるものがあること、なにより自分が生きていくことですらあたりまえではないということ、寒さと空腹の中で実感したのがあの震災の後でした。そして今回もまた、仕事や学校があること、大切な人と笑っておしゃべりすることのかけがえのなさを思い知る日々でした。

「あたりまえ」の反対語は何かという問いを、例えば結婚式の披露宴などでよく耳にします。そういう時の答えは「ありがとう」です。「ありがとう」の語源は古文単語の「ありがたし」で、もともとは「(有難し=)めったにない」という意味です。あって当然の反対だからめったにない、めったにないことに会う奇跡を尊いことととらえ、やがて感謝に転じていきました。

だとすれば、教室で先生の楽しい話を聞く時間、コモンホールで友達と笑いあう時間、お客様がお店に来てくださって自分がちゃんと働いている時間……、私たちが存在するすべての時間は、たとえ目に映る形は以前と同じでも、それが持つ意味や価値は、コロナ禍の前と後とでは、もう決定的に違うものになっているのではないのでしょうか。コロナの前にはたくさんの「あたりまえ」の中で暮らしていた私たちから、コロナの後にはたくさんの「ありがとう」があふれる世界を生きる私たちに変わったのです。

特別な何かではなく、目の前にあるあらゆるもののかけがえのなさに気づき、感謝することで、日々は変わります。まずは今日、私たちがこうしてまた会えたことを素直に喜びましょう。そして今日から始まる一日一日を、支え合って、励まし合って、お互いを思いやりながら、乗り切っていきましょう。

令和3年10月4日

兵庫県立西宮香風高等学校  
校長 谷口 暢謙